



『病気とともに』



徳島県
鳴門市光武館道場
小学6年 西村 葵

私はもやもや病という指定難病患者です。これは原因不明の脳の血管の病気で脳に栄養を送る太い血管がつまりその先の血管が細くなって脳が血流不足を起こすのです。

幼稚園の時、足に違和感を感じ突然しゃがみ込んでしまいました。一年の時には、風船をふくらませたり、フーフーと息を吐いたりすると左手に力が入らなくなりました。そんな様子を見て両親が私を病院に連れて行き、その結果もやもや病と診断されました。お医者さんからは「このまま放っておくと脳こうそくや脳出血になる可能性がある。」と言われ、手術をすることになりました。手術は脳の血管をつなげたり、頭皮の下の組織を移植したりする十時間もかかる難しい手術でした。

手術が終わり家族の顔を見たら、みんなは泣いていました。私が母に話しかけるとさらにみんなが泣いたので、手術は成功したんだと思いました。退院し学校に通えるようになりましたが、激しい運動や楽器を吹いたりすることは禁止されていました。元気に走り回る友達をうらやましく思いながら、静かに毎日を過ごしてきました。

私が四年生になった時、二つ下の弟が剣道を始めました。その道場にある日私も付いて行きました。道場ではみんなが大きな声であいさつをし、一生懸命練習していました。弟は先生に叱られながらも道場の友達と楽しそうに練習していました。その姿を見て私も剣道をやってみたくなりました。その気持ちを両親に話しましたが、もう反対されたうえ、お医者さんからも「剣道は頭を打たれる。その衝撃で、手術した脳の血管が切れてしまう可能性があり危険だ。」と許可が出ることはありませんでした。それでもやりたい気持ちでいっぱいです。館長先生から「医者の許可がなければ防具を付けさせることは出来ない。だが、そんなに強い気持ちがあるなら基本だけでもやってみないか。」と言われ、両親を説得し剣道を始めました。剣道を始めて八ヶ月が過ぎたころ、私の中に今よりもっといろんな事がしたい、やっぱり防具を着けたい、みんなと一緒に試合にも出たいという気持ちがどんどん膨らんできました。そんな気持ちを両親や道場の先生、仲間たちが分かってくれ、何かいい方法がないか一生懸命考えてくれました。その結果、武道具店に相談することとなり、四ヶ月後には打たれても衝撃の少ない私専用の特別な面が出来上がりました。さらに、お医者さんからもようやく許可が出て、私は防具を付けて剣道が出来るようになりました。その時のうれしかった気持ちや私のために協力してくれた全ての人への感謝の気持ちは忘れられません。あれから二年、今もその面は私の頭を守ってくれています。

そして今、私は個人戦だけでなく団体戦にも出場できるようになりました。病気だからと偏見を持つことなく接してくれる大切な仲間と共に日々練習にがんばっています。



私の通っている道場では、剣道だけでなく、戦争で犠牲になった方々の忠魂碑の清掃や、「火の用心」を呼びかけ町を歩いて回るなどの奉仕活動を行っています。小さな力かもしれませんが私も、社会に貢献出来ていると感じています。

私は剣道を通して礼儀の大切さ、チームワークの大切さなどたくさんを学びました。今、私が大好きな剣道が続けられるのも両親、道場の先生、大切な仲間が支えてくれたからです。その感謝の気持ちを忘れずにいたいです。

私の夢は小学校の先生になることです。病気だからとあきらめなかったから剣道と出会え、自分自身が成長できたこの経験を、子供たちに教えていきたいと思います。そして今度は私がだれかの支えになっていきたいと思います。